

2月20日

5. 鶏鳴教会(マタイ 26:57-75)

カヤパ邸における様々な不法行為

1. わいろを使って人を逮捕することは、宗教的指導者にはあってはならない。
2. 日没以降の裁判の進展は許されていない。
3. 裁判官やサンヘドリンの議員が逮捕に関わってはならない。
4. 朝のいけにえの捧げものが捧げられる前に裁判を行ってはならない。
5. 裁判はすべて公開とし秘密裏に行ってはならない。
6. サンヘドリンの裁判は、神殿内にある「正義の殿堂」でのみ行われる。
7. 裁判は、先ず被告の弁護、次に告発という順で行われる。
8. 全会一致で無罪放免を主張しても良いが、全会一致で有罪を主張してはならない。
9. 有罪を立証するためには、証人は二人か三人いなければならず、その証言も細部にわたるまで一致していなければならない。
10. 被告が自らに不利な証言をすることは許されていない。
11. 大祭司が、自らの衣を裂くことは許されていない。
12. 裁判官は、告発のあった案件を審理するだけで、自らが告発人となることは許されていない。
13. 冒瀆の罪は、実際に神の御名が発音された時にのみ成立する。
14. 自白のみを証拠として、人を有罪にすることはできない。
15. 判決の言い渡しは、昼間にのみ許され、夜間には許されない。
16. 死刑にあたる罪の裁判では、実際の審議と判決の言い渡しを同じ日に行ってはならず、少なくとも24時間の間隔を置くべきである。
17. 死刑の評決は、若い判事から順に行ない、目上の判事の影響が及ばないようにすべきである。
18. 全会一致の有罪判決は、無効である。なぜなら、23~71 人も人間が、根回しなしに完全に一致など不可能だからである。
19. 有罪の言い渡しは、有罪決定から三日目以降でなければならない。
20. 裁判官は、人情があり、親切でなければならない。
21. 死刑の宣告を受けた者を、刑執行の前にむちで打ったり、叩いたりしてはならない。
22. 安息日に入った夜、あるいは祭りの日に、裁判を行ってはならない。

## 詩篇 88 篇の嘆きと苦しみ

88 歌。コラの子たちの賛歌。指揮者のため。マハラテ・リアノテの調べに合わせて。エズラフ人ヘマンのマスキール

「ヘマン」は、ダビデが任命したレビ人のかしらが、歌うたいとして選んだ者です。この賛歌は、詩篇の中でもっとも暗いものと言われる。絶望の淵に入れられて、そこから立ち上がることができません。他の賛歌では、どんなに暗いところにいようと、そこから感謝と賛美に変わっていきました。しかし、これは違います。最後まで嘆きの中において、それで終わってしまうのです。しかし、その中にもヘマンの信仰を見ることができます。暗闇の中にある信仰を見つけてみたいと思います。

### 1B 死への接近 1-12

88:1 主、私の救いの神。私は昼は、叫び、夜は、あなたの御前にいます。88:2 私の祈りがあなたの御前に届きますように。どうか、あなたの耳を私の叫びに傾けてください。88:3 私のたましいは、悩みに満ち、私のいのちは、よみに触れていますから。88:4 私は穴に下る者とともに数えられ、力のない者のようになっています。88:5 死人の中でも見放され、墓の中に横たわる殺された者のようになっています。あなたは彼らをもはや覚えてはおられません。彼らはあなたの御手から断ち切られています。88:6 あなたは私を最も深い穴に置いておられます。そこは暗い所、深い淵です。88:7 あなたの激しい憤りが私の上にとどまり、あなたのすべての波であなたは私を悩ましておられます。セラ

穴に下る、というのは陰府に下ることです。彼は今、自分が死にそうになっているということを話しています。そして墓に葬られたら、地上では誰からも覚えられず、自分は地の深い所、深い淵の中に入ると言っています。このように落ち込み、鬱の波が彼の上を勢いよく押し寄せています。しかしヘマンはしっかりと、初めに主を「私の救いの神」と呼んでいます。どんなに死の淵に下がろうと、自分は主の前にいると叫んでいます。

88:8 あなたは私の親友を私から遠ざけ、私を彼らの忌みきらう者とされました。私は閉じ込められて、出て行くことができません。88:9 私の目は悩みによって衰えています。主よ。私は日ごとにあなたを呼び求めています。あなたに向かって私の両手を差し伸ばしています。

病に陥る時に、友人らが去っていくというのは、残念ながら人間の現実です。ヨブもそのことを嘆いていました。そして、イエスご自身が弟子たちが逃げて、ペテロは三度否みました。けれども、主に対して呼び求め、両手を差し伸ばしている姿を見ます。

88:10 あなたは死人のために奇しいわざを行なわれるでしょうか。亡霊が起き上がって、あなたをほめたたえるでしょうか。セラ 88:11 あなたの恵みが墓の中で宣べられましょうか、あなたの真実が滅びの中で。88:12 あなたの奇しいわざが、やみの中で知られるでしょうか、あなたの義が忘

却の地で。

詩篇の中には数多く出てきますが、主に死なせないでほしいと嘆願する時に、地上で主をほめたたえ、恵みの業を宣べ伝えることができなくなるではないか、という訴えがあるのです。まだ、この地上でやるべきことがあるではないですか、という訴えです。確かにパウロは、肉体に留まるのは、有益であると言っています(ピリピ 1:24)。なぜなら、ピリピの人たちのためにまだ奉仕ができるからです。けれども基本的に彼は、死んだ方がはるかにすばらしいと言っています。それは死んで、それで主のところに行けるからだ、ということです。

旧約時代における祈りと、新約のそれとはなぜこれだけ違うのでしょうか？違いは、「贖いの完成」です。贖いが、動物の血によって罪が「覆われる」ことはあっても、取り除かれているわけではありません。旧約聖書における「贖い」の意味は、飽くまでも覆うことです。けれども新約に入って、イエスが十字架に付けられました。そこで「完了した」と言われました。このことによって初めて、罪が取り除かれ、贖罪は完了したのです。したがって、福音書にはラザロと金持ちの話があります。これはイエス様がまだ十字架に付けられる前のことです。どちらも陰府に下っていますが、そこに二つの区画がありラザロは「アブラハムのふところ」ということで慰めを受け、金持ちは苦しみのもとにあります。けれども、キリストが死なれて陰府に下られました。そして勝利を宣言されました。それから囚われの身にいたこれら聖徒たちは、天の中に入ることができたのです。それが、旧約の人たちがはっきりと、死後の希望を宣言できなかった理由です。

## 2B 朝焼けへの期待 13-18

88:13 しかし、主よ。この私は、あなたに叫んでいます。朝明けに、私の祈りはあなたのところに届きます。88:14 主よ。なぜ、私のたましいを拒み、私に御顔を隠されるのですか。88:15 私は若いころから悩み、そして死にひんしています。私はあなたの恐ろしさに耐えてきて、心が乱れています。88:16 あなたの燃える怒りが私の上を越え、あなたからの恐怖が私を滅ぼし尽くしました。88:17 これらが日夜、大水のように私を囲み、私を全く取り巻いてしまいました。88:18 あなたは私から愛する者や友を遠ざけてしまわれました。私の知人たちは暗い所にいます。

このように、暗い所にいるとって賛歌が終わってしまうのです。けれども 13 節には、「朝明けに、私の祈りはあなたのところに届きます。」と言って、朝明けが来ることを信じていたのです。彼は、今は暗い所にいるけれども、必ず明るくなれると信じていました。

思えば、聖書というのは「夜」を多く描いています。実に創世記 1 章、世界の始まりは夜からでした。そこで大事なことは、「夕があり、朝があった。」という表現です。そのためユダヤ人は、今でも一日は日没から数えます。安息日は、金曜日の日没から土曜日の日没までです。このように夜から一日が始まり、そして朝が来るというのは、贖いの歴史そのものではないでしょうか。罪が世界に入り、それが始まりでした。夜から始まりました。そしてキリストの十字架は夜そのものでした。

けれども、いつまでも夜ではありません、朝が来ます。それでキリストが再臨されるのは、夜明けそのものであり、新天新地で昼が来るのです。

この詩篇を読むと、イエス様の十字架上の祈りにも聞こえます。朝を待っているけれども、まだ夜であったことを嘆いているのはイエス様も変わらなかったのではないかと思います。そして、死に至るまでその状態だったのです。そしてイエス様がそうであったように、暗闇の次には昼があります。救いがあります。復活の命があるのです。「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。(ピリピ 3:10-11)」